

〔報告〕 第37回歴史地震研究大会 大会参加記

北原 糸子*

第37回歴史地震研究大会は、三重県・伊賀上野での開催が予定されていた。しかし、コロナ禍で昨年(2020年)4月には第1回緊急事態宣言が出され、その後感染者は減少傾向になったものの、秋頃には再び第2次の感染増加も予想されるとのことから、幹事会の判断で大会は急遽テレワークで行われるとの通知となった。

わたし自身はこの大会を最後の報告発表と位置付けていたので、ズームなどの器具を使った慣れない発表に不安を感じたが、参加することにした。歴史地震研究会会員の木下恭子さんを煩わせて、事前のズーム操作練習もしてみた。耳が遠くなり、音声聞き取りにくいこともあり、ヘッドホンなども揃えてはみたがうまくはいかなかった。こうした状況で、大会2日目の自分の発表では、ズームを使い予め用意したパワーポイントで報告した。オンラインでの発表は、一方的にこちらから喋ればよいことがわかり、15分以内で発表を終了したが、問題は質問に対する対応であった。質問者の音声聞き取りにくく、対応できなかった。質問者の顔も画面には出てこないの、どんなことを質問されているのか、想像もできなかった。3日目の発表については聞き取りにくいこともあったが、総会もオンラインで賛否の応答をする形で行われ、不慣れな面があったものの無事終了した。最後に、行事委員の心配りで、本来開催されるはずであった上野の街の風景と伊賀上野城の天守閣から全方位を眺めた街の映像がビデオで流され、大会は全行程を無事終了した。

通常の大会だと巡検などがあり、大会参加記には、研究会での発表のほか、巡検などについての感想が寄せられるが、今回は巡検もなく、大会参加記とはいえ、現地に赴くのもなく、自宅でPCの前に座っているだけのことである。個人的には、オンラインにそもそも慣れていない点などが禍いして、オンラインでの学会発表は心地よいものであったとは到底いえない。しかし、今後はオンライン型大会が全面的か部分的かは措くとしても、こうした様式での開催が十分予測される。2021年(令和2)1月8日の第2回緊急事態宣言でもっぱらテレワークが推奨されている現状からは、今後は現地に集合して研究大会を開くなどのことは異例に属することになるかもしれないという危惧もある。いずれにしても、研究集会の在り方は、コロナ禍で、

歴史地震研究会が従来採用してきた地方での開催というあり方も一つの転機となるだろうと予測される。

本来、大会参加記であれば、オンライン大会で参加した経験のあれこれを取り上げなければならないが、不慣れな上に聞き取りにくいという問題があって、幹事会の要望に十分応えることができない。そこで、地方での研究集会が始められたいきさつなど、古いことを掘り返して述べることをお許しいただきたい。

「歴史地震」第1号を振り返る

さて、いつ頃から地方での研究集会が採られてきたのだろうか。過去の「歴史地震」を紐解くと、地方で歴史地震研究会を開くようになったのは、第5回の静岡大会からである。私自身は第1回大会から参加したから、記憶に残る範囲で地方大会への先駆けとなった静岡大会などのことなどを紹介し、変則的ではあるが、第37回大会参加記とすることにしたい。

「歴史地震」第1号は1985年(昭和60)11月22日に発行された。第1号には図1のような記念すべき「はしがき」が添えられた。

「はしがき」によれば、第1回(1984年)は歴史地震研究会という名称ではなく、「歴史地震討論会」として、東京大学地震研究所の第2会議室で2日間にわたり開催されたとある。大会が盛会であり、レジメを印刷してほしいという要望があったこと、さらに会場が狭く声が聞き取りにくいという意見があり、翌1985年の第2回研究会(討論会を改めたと注記)からは会場を第1会議室(5階)に移したこと、さらに第2回の研究会の報告を合わせて、「歴史地震」第1号として冊子を刊行したことが述べられている。

以上の「はしがき」から、大会回数と雑誌「歴史地震」の号数がずれている理由が第1回、第2回を合わせて「歴史地震」第1号としたことによるものであることがわかる。

因みに、第1回の「討論会」と銘打たれた研究会は、確かに大盛況であったという記憶がある。第2会議室というのは、地震研究所の2階の所長室と廊下を挟んだ反対側の北側にガラス戸越しに教室が見えるようになっている部屋で、9月初めという暑い時期でもあったので、このガラス戸をすべて開け放し、廊下にも

* 横浜市在住

電子メール: itoko70@gmail.com

はじめに

昭和59年9月7日～8日に、東京大学地震研究所第2会議室で、第1回の歴史地震討論会を開催しましたところ、多くの方々の御参会を得、盛会裡に会を閉じることができました。その後、参会の皆様から、レジュメを印刷してほしいという要望が多く寄せられました。また、会場が狭いとか、後方では声がききとりにくかったなどという御意見をいただきました。そこで、昭和60年9月6～7日に第2回の歴史地震研究会（討論会を改めました）を開くに当り、会場を第1会議室に替え、報告集を印刷することにしました。こうして出来上がったものが、本書（歴史地震 第1号）です。本書には第1回、第2回の研究会のプログラムを載せ、目次がわりといたしました。なお、プログラムの講演題目のうち、その後変更されたものは原稿の題目を用いました。ページの入っていない御講演は、残念ながら期限までに御報告をいただけなかったものです。

今後とも、歴史地震研究会を盛り上げるとともに、本書の刊行にも努力するつもりであります。皆様の御協力を期待いたします。

昭和60年11月22日

地震研究所創立60周年記念式典の日

図1 「歴史地震」第1号の「はしがき」

第一回歴史地震研究会	
1984年9月7日(金), 8日(土)	
地震研究所第2会議室に於いて	
プログラム	
◇9月7日(13時～17時)	
1. 宇佐美 龍 夫	開催の挨拶
2. 飯 田 汲 事	1510年永正の遠州灘今切の地震について…………… 1
3. 羽 鳥 徳太郎	歴史津波の史料—供養碑・記念碑について……………11
4. 北 原 糸 子	歴史地震と社会史研究の接点の可能性について……………
5. 上 田 さち子	天正13(1585)年の伊勢神宮関係の地震史料について……………15
6. 川 村 優	安政地震を地方文書にみる一二、三の事例を通じて……………27
7. 宇佐美 龍 夫	歴史地震の時刻精度……………39
◇9月8日(9時30分～13時)	
8. 石 橋 克 彦	歴史地震研究で感じたこと……………55
9. 宮 田 登	地震のフォークロア……………
10. 広 井 脩	新聞研究所収の地震瓦版……………
11. 都 司 嘉 宣	神奈川県寺院過去帳アンケート調査結果でみた歴史地震被害……………59
12. 伊 藤 純 一	古代の地震—「六国史」の地震記録を中心に……………

図2 第一回歴史地震研究会のプログラムの一部

立ち見で参加者がいたほどの盛況ぶりであった。第1回大会の発表者は図2のように、会の主催者である宇佐美先生は当然のことながら、飯田汲事先生、羽鳥徳太郎先生、民俗学の宮田登先生、広井脩先生などすでに鬼籍に入られた方々もおられた。今なお健在な石橋克彦氏や都司嘉宣氏は歴史地震という新しい分野にフレッシュな空気をもたらす報告で注目を集めた。

また、このプログラム構成からわかるように、この研究会は地震学本来の理学系分野にこだわらず、房総の歴史に詳しい川村優先生、後に災害社会学という分野の第一人者とされた広井脩氏や、民俗学の宮田登氏、歴史学出身の私などが参加、地震という現象を、理学だけにかぎらず社会事象として捉える試みとして注目され、第1回の盛況ぶりにつながった。第1回のプログラムの冒頭におかれた宇佐美先生の開催の辞は、本文には記録として留められていない。以下、11の報告のうち、論文が掲載されたのは5件、このうち、手書き原稿が2件、第2回研究会では14編の論文が掲載されたが、このうち手書き原稿は5件ある。査読もなく、手書きのさまざまな、ある種牧歌的な学会誌であった。この後引き続き研究会は東京大学地震研究所の5階ホールで開催され、会誌発行は第1、2号が東京大学地震研究所、第3号で、発行者は歴史地震研究会と変わり、2代目会長の島崎邦彦氏と秘書の上田和枝氏連名の奥付が付されている。これは、宇佐美先生が1986年(昭和61)に東大地震研究所を退官され、島崎邦彦氏が2代目の会長を引き継いだことによる。1989年の第5回大会開催時には、都司嘉宣氏が会長を引き継ぎ、その後18年の長きに亘り務められた。なお、第2号の末尾には174名の会員名簿が掲載されている。

地方大会は第5回静岡大会から

さて、第5回研究会は静岡県職員会館「もくせい会館」を会場として開催され、その記録は会誌第4号に掲載された。私の記憶するところでは、静岡放送の川端信正氏から外部での集会について提案があり、宇佐美先生もこれを了解されて、静岡大会となった。2日間にわたるこの大会では、16件の報告と論文が掲載されているが、9月21日の第1日目は7名の報告、第2日目の午前中に富士山火山活動、安政東海地震に関する報告が3件、安政南海地震に関する報告が3件まとめて報告されているところから、これが市民に公開された研究会であったと思われる。この会から研究集会のうち1日を割いて巡見日としている。大

会参加記は静岡大会への口聞きとしたという責任からか、わたしが巡見参加記を書いた。この大会は静岡県地震対策課の積極的な協力があったと記し、第2日目の研究集会終了後の午後3時過ぎ、静岡県庁内の防災施設の見学が組み込まれている。当時は東海地震説がもっぱら話題となった時期でもあり、静岡県はその対応策として、警戒宣言が発令された場合、地震災害警戒本部(発令後は災害対策室)が設置される常設の総合指令室などの見学、情報伝達システムの機器などの見学、全国でも唯一だという地震対策課が設けられたことなどの説明をうけた。

なお、補足ながら、この第4号の末尾には、「歴史地震史料のデータベース化に関する討論会」の記録が付されている。宇佐美先生の挨拶の後、国立防災科学研究所の今は亡き岩崎伸一氏、都司嘉宣氏(東大地震研)、国文学のデータベース化(国立史料館:安永商志氏)、CD-ROMを用いた古文書のデータベース化(東大地震研:鷹野澄氏)、光ディスク装置による古文書管理システム(船橋市立図書館:須藤元夫氏)などの発表が行われた。

今から33年前の史料のデータベース化への動きである。このきっかけは、宇佐美先生の挨拶によれば、『新収日本地震史料』の刊行も1989年の補遺の出版を以て一区切りとなることであった。総頁1万4000頁という膨大な史料をデータベース化して使いやすくするという趣旨に期待する。ただし、武者の4冊の『増訂日本地震史料』、『日本地震史料』も併せてデータベース化しないと地震史料としてのデータベースは完結しないと述べられている。

続く岩崎伸一氏の報告によれば、1987年(昭和62)の地震予知研究シンポジウムにおいて石橋克彦氏が「歴史地震研究は今後の地震研究に大きな役割を演ずるが、研究体制がいかに貧弱であり、歴史地震研究の拠点づくりと古文書解読ができるエキスパートに頼るのではなく、誰もが史料にアクセスできるような史料のデータベース化を」と提言したことにより、すでに検討を始めているというものであった。しかしながら、この動きは資金面や解決すべき技術面でのレベルが要求度に比して対応力が欠けていたのか、その後は大きな進展はみせなかった。歴史地震関係史料に限れば、東日本大震災が発生し、すでに千年前に貞観地震の記録にあるにもかかわらず、社会全体がその事実を忘却していたため、手痛い報復を受けたことに国も行政も反省し、書籍類や古文書類も含めたデータベース化を通じて社会全体の仕組みを変えようということになるまでは本格的な取り組みはなされなかった。そして、現在のデータベース化の盛況となった。

話を元に戻すと、地方大会はその後、東京と地方

で隔年に開催されることが了解された。ただし、地方での大会では市民に研究会を公開し、さらに市民向けの公開講演会を開催するなど、地方にとっても市民の防災意識を高める意義を認めた場合に好意を以て迎えらる。地方での大会開催に、研究会の会場や公開講演会の会場などの無料貸し出しなどの代替便益の提供も伴ったからである。

今回の伊賀大会はコロナ禍で中止となり「オンライン伊賀大会」としての開催となったが、すでに宿泊の予約や研究会の会場も予約済みの状況であったことを思えば、伊賀市にご迷惑をお掛けした点多々あったのではないかと思われる。行事委員、幹事のご苦労も偲ばれる。

コロナ禍はいつ終息するのか見込みも付かない現状ではあるが、今後、地域での大会開催は、これまで築いてきた歴史地震研究会のあり方として欠かせないものでもあるから、オンラインと現地集会を組み合わせるなどの工夫を凝らした開催をお願いしたい。